

## 〔編集後記〕

第82巻第5号は総説1編、症例報告1編、研究紹介1編、3つの教室の例会の記録、平成17年度猪之鼻奨学金研究補助金による研究報告書、そして海外だよりが1編掲載されています。落合武徳教授の総説「食道外科の進歩－食道癌手術死亡率95%からゼロへ」は本年7月に開催された第60回日本食道学会における特別講演の一部を早速ご寄稿頂いたものです。千葉大学第2外科（現先端応用外科）が消化器外科治療の中でも特に高い専門性が要求される食道癌治療の分野で、常に世界のトップランナーとして歩み、手術成績の向上に貢献されてきた経過を述べられています。紙面で紹介されたのは実際のご講演のごく一部と推察いたしますが、何かの機会に全体を通して直接お聴きしたいと願っています。

国保国吉病院外科の和城光庸氏による症例報告「Gastric GIST and sigmoid colon neurofibroma in a patient of neurofibromatosis type 1」も興味深く読ませていただきました。神経線維腫症I型に胃とS字状結腸の粘膜下腫瘍を合併し、精査の結果、胃はGIST、結腸は神経線維腫であった症例で、散発型GISTとの違いを考察されています。症例報告の重要性については82巻2号の編集後記で栗山喬之教授が述べられていますが、私も全く同感です。私の恩師奥田邦雄先生（第一内科元教授、故人）が「同様なケースを少なくとも3例集めて記述し、適切なreview of the literatureを添えれば立派な原著論文になる」とつねづね言われていたのを思い出しています。

新任の清水栄司教授（神経情報統合生理学）がご自身の研究の一端を紹介されている「記憶と学習の分子メカニズムの解明は、高度情報化社会に

人類が適応していく方法の答えを出す事ができるか」は表題からして興味をそそるものでしたが、明快かつ巧妙な語り口で、一気に読ませていただきました。興奮性神経伝達物質グルタミン酸のイオンチャンネル型受容体の一つであるNMDA受容体が哺乳類の記憶・学習に関与する重要な分子であることの解説に始まり、筆者ご自身が中心となって遂行された遺伝子操作により学習能力を高めうることを哺乳類で初めて実証された研究の紹介へと続き、締めくくりでは、「情報化社会における脳の健康を守る」ことを目標に「分子レベルでのメンタルヘルス」を推進される決意を述べられています。今後の研究のご発展を心よりお祈りしています。

本号の海外だよりは、病原分子制御学の野田公俊教授のご紹介により米国NIHのPulmonary Critical Care Medicine Branch (Dr. Moss) に留学中の黒田文伸先生（加齢呼吸器病態制御学）から寄せられました。Moss先生が来日された折に黒田先生が直接お世話され、留学の話につながった経緯が書かれていますが、私自身も同様の経緯で留学するチャンスをつかんだ30年近く前のことを懐かしく思い出しました。

最近比以前に比べて留学希望者が少ないと聞きます。もちろんわが国が諸外国をリードしている分野も少なくないと思います。しかし、海外留学で得られることは学問的なことよりもむしろそれ以外のことの方が多様な気がします。卒業後間もない方々には、とくに若いうちに一定期間外国で過ごすチャンスを積極的に作っていただきたいと願うものです。

（編集委員 野村文夫）